

# TYPEQUICK 導入事例

## ～ タイピングはパソコンの基本 ～

### 神戸女子大学

Essay : 小松 俊朗 先生

使用商品タイプ : Professional ネットワーク版

長年にわたりご利用いただいている神戸女子大学の小松先生にエッセイを寄せていただきました。

タイプクイックを活用される際のご参考にしていただければ幸いです。

「ブラインドタッチが出来るって、カッコいいと思わないかい？」

新入生の第一回目の授業の、きまって私の第一声である。

四年後、卒業して社会人となって、ある会社に勤めることになったでしょう。初日、挨拶を終えて机についたところで、上司から取引先へ送る手紙の清書を頼まれた。手書きの原稿をパソコンの脇に置いて、貴女の指がキーボードの上に置かれたとみるやすごい速さでキーを叩いていく。カタカタ、カタカタとリズムカルな音が部屋中に流れ出し、周りにいる先輩たちの目が貴女に注がれる。貴女の目は、原稿と画面を交互に見つめるだけで、両手の指は別の生き物のように素早く動き続ける。まるで氷上を舞うフィギュアスケーターのように、あるいは白鳥の湖を踊るバレリーナのように、あるいはリストの曲を奏でるピアニストのように、軽やかに動いている指は優雅にも映る。

ほれほれするような貴女のタイプ操作を見て、後ろの席のちょっと福山雅治似の男性社員から、「今晚食事でもどう？」と誘ってくるかもしれない。あるいは、たまたまそのとき社長が通りかかって、「今度の新入社員の娘は出来る！うちの跡取り息子の嫁にどうだろう」となるかもしれない。

そして、続けて質問する。

「こういうことを専門用語で何と言うか知っていますか？」

そう、玉の輿と言うんです。そんなうまい話が、と笑っているけど、貴女たちの先輩に実際にいたんだから・・・と言ってAさんの話をする。

20年ほど前の教え子であったAさんは、卒業してソフトウェア関係の会社に入った。そして、その会社の社長ではなかったが、出入りの印刷会社の社長に仕事ぶりを見初められて、その跡取り息子の嫁として迎えられた。現在は社長夫人である。今でも年賀状を頂いて、「先生に教えて頂いたエクセルが会社の業務に大変役に立っています」と添え書きがある。社長夫人がエクセルを使って業務をしているのだからどれくらいの規模かは想像できるが、玉の



輿に乗ったことは間違いないのである。

将来仕事をするようになることを考えたら、ブラインドタッチが出来るようになればいいな、と思う学生は多い。でも、私には無理、とってしまう。機械は苦手だから、運動神経が鈍いから、指が短いから、などと出来ない理由を挙げていく。

そんなことはない。誰でもブラインドタッチが出来るようになる。地道に根気よく練習しさえすれば。

パソコンの初心者であっても、ブラインドタッチが出来るようになる。

運動神経が優れているとかいないとか、指の長短など、全く関係なく、ブラインドタッチを習得できる。むしろ、習得に要する時間には個人差があるが、根気よく練習しさえすれば誰でも出来るようになる。

私の長男は(この原稿が本人の目に触れないことを願うが)、生来、不器用で運動オンチである。幼稚園児だった時の話だが、ある日園から泣きながら帰宅してきた。連絡帳に「運動会の練習で、玉入れが入らなくて泣いていました。おうちでも練習させて下さい」と書かれていた。玉入れの籠に自分だけ入らない。次のグループが来てみんな入れて走り去っても、まだ入らない。次、次とみんな入れて走って行くのに、自分だけどうしても入らない。ついには最後に一人だけになって、先生が籠を手の届く高さに下げてあげて、ようやく入れることが出た。その時には子どもながらの自尊心が傷つけられたのだろうか、しゃくり上げながら泣いて玉を入れ、そのまま泣き通して家まで帰ってきたのだった。

その話を聞いて、私は早速特訓をすることにした。新聞紙を丸めて100個の玉を作り、棚に籠をぶら下げた。そして、彼の一投を見て、私は瞬時に玉が入らない原因を理解した。玉を手に取り、振りかぶって投げる。その手を後ろに振りかぶったときに、玉が手から離れそのまま後方に飛んでいくのだった。これでは永久に入らないわけだ。そこで籠の高さを手の届くところから始めて、徐々に高くしていくという作戦で行くことにした。毎日の特訓が実り、運動会当日は何と2投目に入れることが出来たのだった。

サッカーボールを蹴ることも同様だった。蹴ろうとして足を振り上げて空振りをする。そのまま戻す足がボールに当たるので、後方に転がっていくのだった。

「大きくなったら、きっといじめられっ子になる」と、心配した(彼にとっての)祖母が「私がお金を出すから水泳を習わせなさい」と勧められて、スイミングスクールに通わせることになった。水泳なら小さいときから習わせたなら、運動神経に関係なく人並みに泳げるようになるから、何か一つ得意な運動を身につけさせたい、という祖母の願いだった。

一度スイミングスクールの練習を見に行ったことがある。プールの中でコーチを困むように子どもたちが話を聞いている。だが、長男はその中にいない。一人離れたところで浮き輪の中に身を置いて、ぷかりぷかりと一人の世界

を楽しんでいるのであった。

それでも毎週通っていると、泳げるようになっていった。小学5年生のときだったか、地区の小学校の水泳大会に代表の一人として出場することになった。勿論、私はカメラを持って応援に行った。そして、50m自由形のレースである。飛び込み台に立ち、スターターが「ヨーイ」とピストルを空に向けてや、一人がドボンと飛び込んだ。長男だった。フライングである。もう一度、飛び込み台に立ち、身構える。そして「ヨーイ」という声にまた一人ドボンと飛び込んだのも、我が息子であった。結局、泳ぐことなく、彼は失格となってしまった。

中学・高校と、彼は水泳部に所属した。私にはひと掻きしか出来ないバタフライでさえ、プールの端から端まで苦もなく泳ぐ。他の運動はさっぱりだが、水泳という得意種目を、彼は身につけることが出来た。不得意なことであっても続けることによって成し遂げうるということを、彼は身をもって体験したのである。

そして、熊本の大学に進むこととなった。進学祝いに買って上げたノートパソコンにタイプクイックのソフト(データパシフィック社)を入れて、私は彼に言った。

「これからはパソコンが使いなれば話にならない。でも、パソコンの基本はブラインドタッチだ。このソフトで練習すれば必ず出来るようになる。15分でいいから、毎日続けてごらん。必ず出来るようになる。」

夏休みに帰省した彼に聞くと、タイプクイックのレッスンを1~10まで終えたという。しかしさすが不器用なだけあって、キーをいくつも壊して修理したということであった。そこで、私が授業で毎回実施しているタイピングテストをやらせてみた。なんと、神戸女子大で歴代ベスト3に入るタイムを叩き出したのである。

どんなに不器用でも、運動神経が鈍くとも、そんなのカンケイない!誰でも練習を続けさえすれば、必ずブラインドタッチが出来るようになる。私は長男の体験から、そう確信している。

だが、10分でも15分でも、毎日続けるということは、そうたやすいことではない。三日坊主で終わる人のほうが大多数ではないだろうか。その大多数にもブラインドタッチを身につけさせるように指導するのが教師の役目である。

「どうしたら練習を続けることが出来ると思いますか?」

私は学生たちに問いかける。

「それは、絶対にタイピングをマスターしてみせる、と強く思うことです。」

その思いが強ければ強いほど、心の逡巡なく練習に取り組むことができる。その思いが継続のエネルギーとなり、思いの強さがそのまま練習に集中する強さになるからである。そして、成果は必ず練習量に比例する。

「将来、格好良くタイピングしながら仕事する自分を夢見て、今はひたすら練習しましょう」と呼びかけるのだが、それだけでは半分の学生をもその気にさせることは出来ないだろう。そこで私は教師の特権を振りかざす。タイプ練習をせざるを得ないようにするのである。

「ひと月経ったら試験をします。それまでタイプクイックでしっかり練習しといて下さい」と言って、授業の方針などを説明した残りの時間はタイプクイックの練習に充てる。

初回と第二回の授業では45分、第三回の授業では30分、第四回の授業では15分をタイプクイックの練習に充てている。授業中に相当時間練習させることによって、自習時に

取り掛かる垣根を低くする狙いだ。最低でも週に一度はタイプ練習をしていることになる。

「タイプクイック」はとても良いタイピング練習ソフトである。まず最初にタイプをする際の姿勢から入るところが、気に入っている。ホームポジションに指を置くという説明より前に、背筋をしゃんとしてパソコンに向かう、と説くところは大変良い。美しい姿勢で、速く打てるのが大切なのだ。私は学生に「後美人に見られる姿勢でタイプしなさい」と指導している。そして、区切りに来ると、とにかく褒めてくれるメッセージが出る。これも学生のやる気にプラスに働く。このソフトは、ゲーム的な要素は少ないが、正統派のタイピング練習ソフトである。

ひと月経って実施する試験は、私が独自に作成したソフトである。1問45文字で、10問の文章を入力するのに要するタイムを計測する。問題文は100問用意されていて、ランダムに選ばれた10問が出題されるようになっている。

「この試験で4分以内に打ち終えなければ単位はあげません。今日から毎週、授業開始時にテストします。」

「えー、そんなん、ありえへん!」といった声が聞こえてくるが、聞こえぬふりをする。

学生にとって『単位が貰えない』ことほど強制力の働くものはない。嫌でも練習せざるを得なくなる。それでも練習しない学生も、勿論いないことはない。

はじめは受け身で嫌々やっていた学生も、じきに目の色を変えて取り組み始めるようになる。このタイプテストのタイムは学内のデータベースに記録されるので、毎回の成績の伸びる様を知るによって自分の成長が自覚できることと、全学生の中での自分の順位が表示されるからである。ちょっと上に友人の名を見つけると、負けたくない、という気持ちが湧いてくる。いいタイムが出るまで何度も挑戦するようになる。

ある程度速く打てるようになると、それ以上記録が伸びなくなるものである。そういうときは、タイプクイックのソフトをもう一度練習することを勧める。基本に立ち戻るのだ。そうすると、必ず壁を乗り越えることが出来る。

さらに、毎週の結果を集計して、ベスト100に入った学生をホームページで公表する。学籍番号・氏名・タイム・順位を表にし、その中で50位以内の学生については順位が第一回からどのように変動してきたのかを折れ線グラフにして表示している。また、上位100人というのでは速く打てる学生しか載らないので、前回から一番多く順位を上げた人を「今週のMVP」として、準MVP、MVP3・4・5位の5人をベスト100と並べて掲載する。

上位の人は一人抜くのも大変だが、下位の人はちょっと頑張れば10人、20人はすぐ抜ける。頑張った成果が今週のMVPとして認められると、もっと頑張ろうという気持ちになる。また、1週間ごとにホームページは更新され「今週のMVP」は毎週変わるので、折角名前が載っても見落としてしまうこともある。そこで、タイプテストのソフトを起動したら『おめでとう!貴女は今週のMVPです。』と画面に表示され、ホームページで確認させる。

ホームページに氏名を公表することについて、レポートにクレームが書かれていたことがあった。個人情報だから



名前は外して学籍番号だけにしてほしい、というのだ。何かという個人情報保護が壁となってくる。しかし、次のレポートを読んだとき、私の心は決まった。

「授業開始時のタイプテストについては、すごく感謝しています。すごく成長することができました。私は前からパソコンに触れるのは好きだったけれど、ちゃんとした指使いもできていなかったし、打つのも遅かったのです。しかし、先生が最初の頃からずっと、『毎日頑張れば、絶対タイプは速くなるから頑張っ！』といい続けていました。私は器用な方ではないし、速くなっていくなんて思ってもいませんでした。しかし先生のいうように、私もタイピングができるようになって、働くカッコイイ女性になりたいと思い、なってやると決意し、頑張ってきました。私は寮ですが、寮のパソコンでもタイプクイックを練習しました。それからさらにやる気が増したのは、テストが始まって順位が付くようになったことです。初め、私はぎりぎりのところで100位に入れず、とても悔しかったので、まず100位に入ることを目標に頑張りました。すると、私の遅かったタイムが段々伸びていき、ついに100位に入れたときには、本当に嬉しかったです。その日、地元にいる両親に小松先生のホームページを教えました。以来、両親は毎週見ていてくれるようです。やはり、両親への報告だし、見てくれていると思うとさらに頑張れます。それから、100位以内をキープすることと、順位を上げることが目標に頑張りました。日に日にタイムが縮まってくると、タイプテストをすることが楽しくなってきたし、何度もテストをするようになってきました。これからもっとタイムを縮め続けていきたいです。」

初めて親元を離れ、遠く離れた地の大学に娘を行かせている、親の気持ちを思う。元気でいるだろうか、勉強についていけているか、友達と仲良くやっているか……。毎日、ことによると四六時中、娘のことを考えているかもしれない。

その娘から「ベスト100に載ったから、ホームページ見て！」という電話。すぐにパソコンを開いて探してみる。上からズーと見ていく。そして、あった。紛れもない娘の名前がしっかりと見つかった。頑張っている証しを目にして、うれしくなる。高い学費だけど大学に行かせて良かった、と安心することだろう。それから毎週、更新日を待つホームページを開く。少しずつ順位を上げている娘を、誇らしく思う。充実した大学生活を送っていることを実感し、親として満足な思いでいることだろう。

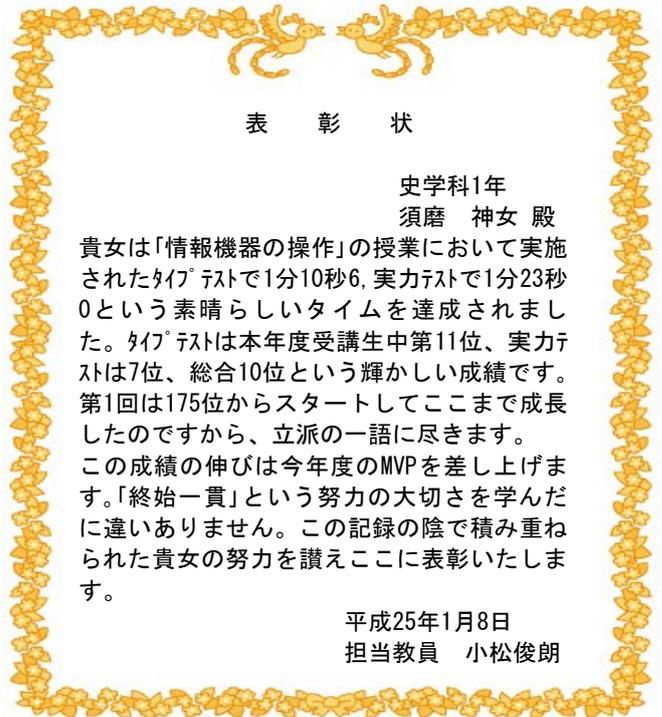
名前が載っているから、いいのである。これが学籍番号だけなら、ぱっと見ただけでは娘とは分からない。親孝行のためにも、誰が何と言おうと、断固、氏名を掲載することは譲らないことにした。

もう一つ、学生たちの目の前にニンジンをごら下げる。

「ベストテンに入ったら表彰します。」

副賞は口では言えないような豪華賞品、などと笑点の司会者のようなことを言ってやる気をかき立て煽るのである。

12月、最後の週でベストテンに入った学生の、第一回の成績から1年間の成長の足跡を調べる。そして、その内容にふさわしい文面を考えて一人一人の表彰状を作成する。例えば、次のようなものである。



大晦日に元町の大丸に出掛け、副賞を家内と選んで購入する。身近に置いてずーっと使って貰えるような記念の品を選ぶ。冬休みの私の恒例行事となった。

そして、最後の授業時にクラスみんなの前で表彰するのである。

おめでとう！よく頑張ったね、と。

